

逆境もまた「当たりくじ」 どん底から切り拓いた我がビジネス人生

セブン&アイ・フードシステムズ社長
前イトーヨーカ堂中国総代表

埴昭彦

インタビュー

空襲、家族離散、火事、貧困……埴昭彦氏の人生は幼少期から苦難の連続だった。そういう埴氏がいつの頃からか口ずさむようになった言葉「人生、すべて当たりくじ」。ビジネスの世界に飛び込んで様々な逆境を乗り越える上でも、常にこの言葉があった。イトーヨーカ堂の中国での店舗展開という重責を担い、見知らぬ地で見事その実を結んできた埴氏の人生観、仕事観に迫る。

はなわ・あきひこ——昭和17年東京都生まれ。39年青山学院大学経済学部卒業。42年イトーヨーカ堂入社。労働組合役員を務めた後、57年首都東ソインマネジャーとして復職。同社女子バレーボール部総監督なども兼任し、日本一に導く。営業本部長だった平成8年、中国室長を任じられ、中国での店舗開拓に尽力。前イトーヨーカ堂中国総代表。現セブン&アイ・フードシステムズ社長。著書に「人生、すべて当たりくじ」(PHP研究所)。

人生、すべて当たりくじ

——セブン&アイ・フードシステムズはまだ新しい会社ですね。
埴 私どもの会社はセブン&アイホールディングスのフード事業会社として一昨年設立されました。デニーズジャパン、ファミール、ヨーク物産の三つを吸収合併し、レストラン、ファストフード、それに社員食堂などのコントラクトフード事業の店舗展開(二〇〇九年二月末現在、計九百五十九店舗)を図っています。

いま、「生活で何を節約しますか」と聞かれて約七割の方が「外食」と答えるような時代です。このように外食産業が大きな曲がり角にある厳しい時だけに、やはり事業を集約して仕入れ先などを統合し、食という一つのテーマを追求して

いくべきではないかと。ただ、業績は大変厳しくて、初年度は赤字でした。何とかこれを黒字にしたと思います。目下奮闘している最中なんです。

もう一つ、私にはイトーヨーカ堂取締役中国総代表という仕事があります(取材当時)。月に約一週間は店舗がある中国の北京や成都に行っており、現地のイトーヨーカ堂の責任者たちと会議をして、今後の事業展開などを話し合っています。売り上げは一千億円弱といったところでしょいか。おかげさまでこちらのほうは大変順調に利益が伸び続けております。

——日中両国で経営の陣頭指揮を執っておられるのですか。
埴 セブン&アイ・フードシステムズが設立された後、中国から呼び戻され、二つの重責を担うようになりました。

中国室長の辞令をいただいたのは十三年前の平成八年、メンバーは私一人でした。それまで営業本部長だった私には二万五千人の部下がいたんです。それが突然ゼロ、しかも中国は初めての土地です。周囲からは左遷と見られ、これから一体どうなるのかという思いでした。

しかし、一緒に行きたいと名乗り出る仲間が現れて、彼らが必要にやってくれたおかげで今日があると思っています。中国という大地に播いた種は、花を咲かせて、実を結ぶようになりました。

——試練をバネにして、未開拓の地に事業を定着していかれた。
埴 やはり大事なものは、どのような厳しい環境でも、そこに踏みとどまって頑張ることだと思います。逆境や不遇の時、「いやだ、いやだ」と逃げ回ったり自己逃避し

たり、じっとしてただけでは何の解決にもなりませんから。そんな時は、自分の心を強くして、闘い、克つ以外にないんです。

人事異動でも何でも世間の誰もが「外れくじ」と思う出来事がありますね。でも、世間や周囲の人がどうあれ、自分だけは「このくじは当たりだ」と思うことが大事なんです。そのように考えたら、何事があるかと「人生すべて当たりくじ」じゃないですか。

私は子供の頃から、随分と劣悪な環境の中で生きてきましたが、その時、常に自分に言い聞かせてきたのが、この「人生、すべて当たりくじ」という言葉でした。

辛酸をなめた少年時代

——お生まれは東京ですね。
埴 ええ。昭和十七年、豊島区大